宮崎大学教育学部紀要　人文科学　第70号（1991）　1—6頁

英語辞書の現状と今後の展望（Ⅰ）
—— 英和辞典の場合（その1）——

南　太一郎

A Brief Sketch of English Dictionaries: Their Present Conditions and Future Prospects（Ⅰ）
—— The Case of English-Japanese Dictionaries (1) —— *

Taichiro　MINAMI

1．緒　　論

1．1．緒論の序

外国語の学習・習得にとって，たとえ限界はあるにしても，辞書の果たす役割が極めて大きいことは言うまでもない。英語の場合は特に，知識が固まり始める高校段階以降の時期に辞書は不可欠とも言える有効な学習の道具となる[1]。そういうこともあって，日本における高校生（以上）を対象にした辞書は，表現はいささか不適切ながら，今や雨後の筍の如く数多出版されていて，各々が種々の特色をセールスポイントに出版社の思惑とも絡んで凌ぎを削り，大隆盛時代を築いていると言っても過言ではないだろう[2]。辞書もまた商品であって，例令どんなに学問的・良心的であっても売れなければ仕様がないわけで（但し，これだけが辞書を有らしめる価値や哲学ではないとは思うのだが），それが次々特色をもった辞書が生み出されている大きな理由になっている。日本で作られる学習英語辞典の場合，この競争原理が辞書の高いレベルをもたらしている要因になっていることは否めない事実であって，それは日本人と英語との歴史的な係わりをその背後に担いつつ[3]，今また“国際化”の中で日本人に求められている英語力のレベルアップという事情とも複雑に絡んで，英語辞書の老舗，英国の出版社等をも巻き込んだ形で学習辞典という一大カテゴリーを形成してきているのである[4]。

英語辞書という場合，特殊辞典を除き，主として，1）英和辞典，2）英々辞典，3）和英辞典の三種に分類される。日本で出版されるのは主として1）と3）だが，特に1）の英和辞典（中でも学習英和辞典）のレベルは今日極めて高く，一時代前のものと比べると隔世の感がある程の充実ぶりを示していると言えるであろう。英語を習得する目的には種々あるとは思うが，まずもって英語という外国語が外国語でなくなることだ，と規定するならば[5]，辞書の使用においても須らく英々辞典を過不足なく利用できることが望ましいのは言うまでもない。しかし，一足飛びにそこに至ることは至難の技であって，やむを得ず学習の初期・中期段階に於ては二ケ国語辞典（bilingual dictionaries）としての英和，和英辞典（特にも英和辞典）の利用ということが前面に出てくるのはやむを得ないことであろう[6]。

本稿とそれに続く予定の各稿を貫く全体としての最終目的は，日本の大学生を含めた一般社会人と英語辞書とのあるべき係わりや英語辞書のあるべき姿について考察することであるが，上記の理由からして，その為にも英和辞典の現状と問題点，さらには将来にわたる展望というものを押さえておく必要があると思われる。

1．2．英和辞典の種類とその対象

現在日本で出版されている英和辞典の数が，小型のもの，初級用のものから大辞典の類に至るものまで全てを含めて考えた時どれ程になるかその実数は詳にしないが，恐らく優に数十種類に及ぶであろうと思われる。高校生以上を対象とするいわゆる学習辞典やそれに準じるものだけに限ってみても，筆者の手元にあるものだけでも２０種類以上あり，これだけでも網羅的ではない。その数たるや恐らく他の英語を外国語として学んでいる国々の比ではないであろう。何故これ程まで英和辞典の数が多いのか，多分その理由の中に前述したような日本の特殊事情と競争原理，市場原理に基づく出版社同士の辞書販売合戦ともいうべきものが介在していることは確かであろうと思われる。辞書は書籍の販売に於ては一大市場なのである。勿論，それを支える読者，購買者層の種々のニーズというものがその前提にあり，出版社側がいち早くそれに対応しようとしたり，そのニーズを汲み取って購買者層を刺激しリード（誘導？）している，ということなのかもしれないが，いずれにしてもその両者の“緊張関係”から種々の辞典が市場に出回っていると言えるであろう。

ところで，一口に英和辞典と言ってもそのレベルは様々である。今，高校生以上を対象とするものを，出版社側の公称する収録語彙数（この数え方が実は不明確で，必ずしもその数を額面通り受け取るべきではないのだが）で仮に大雑把に下位区分してみると，１）４万語以下，２）４万語，３）６万語，４）７万５千語，５）９万語以上の５つのレベルに大別することができるであろう[7]。この中で，いわゆる高校生をその主たる対象としているのが１）～３）のレベルのもので最もその数が多く，４）以降は一応高校生を第一の対象にするものの，大学生や一般社会人も使用できるというのが謳い文句になっているものであり，その数は前者には及ばないもののそれでもかなりの数に上る。

1．3．均質化と相互関係

これらの（学習）英和辞典を一瞥してみて分かることは，いずれも内容的レベルだけではなく，紙面のレイアウト，ページ数，体裁，価格といった外縁的なレベルでも極めて平均化，均質化してきているという点である。それぞれが異なる際立つた特色を持っていれば，一冊で済ますことができないという使う（買う）側からの煩わしさのようなものが出てくるが（かと言って，それでも実際には学生・生徒が一人で数冊も持つという場合は極めて稀だと思われる），ほとんどが均質化していれば，極端な場合，店頭で最初に手にしたものでもよいし，目をつぶって取り上げたものにするとしても大した当り外れはないとも言える[8]。しかし，実際は均質化の中で各々が少しずつ違った特色を（時には無理に）出そうとしているので，慎重に選ぶとなるとそれだけ却って慣れない者には判断が難しくなり途方に暮れる，ということにもなりかねない[9]。

実際，（英々辞典の場合も多分にそうであろうと思われるが）英和辞典の編集・執筆を行う場合には，当然先行の辞典類を参照することになる。（全く独創的にゼロから一冊の辞書を創

り出すということも皆無ではないかもしれないが，今日ではそれは全く一般的ではないであろう。）　多少とも辞書製作の実際に係わってみると（執筆する項目の重要度によって違ってくるとは思うが），先行辞典を参照（ある時には改変使用）しつつ，いかに「ノリとハサミ」的作業が介在してくるかを知ることになる[10]。また，編集レベルにおいても，同一の編者（執筆者）がいくつかの辞典製作に係わっている（名と実と両方考えられる）ということがあり，作成のコンセプトにおいても極めて近似，類似のものが出来上がる，という側面も存在する。他書が考案したり取り入れたりした特色を自分の辞書も取り入れていかなければ市場競争に遅れを取るということにもなり兼ねないわけだから，勢い類似の辞書が次々と新刊されたり，改定・増補されたりすることになり，同工異曲的な辞書が店頭に所狭しと並ぶことになるわけである。出版点数からすれば誠に活況を呈するわけであるから慶賀の至りということになるのであろうが，敢えて言えば，どれかを選ぶとなると誠に迷惑窮まりない混乱ぶりだと言えなくもないであろう[11]。

1．4．英和辞典の最近の傾向・特色

最近の英和辞典の傾向あるいは特色を一言で表わすとすれば，それはあらゆる面で“user-friendly（使用者に親切）”であろうと勤めていること，と言うことができるであろうか。勿論，これまでの辞書も当然使用者を想定してのものだったわけであるから user-friendly ではあっただろう。しかし，今日では，この言葉の意味する内容はすこぶる以前とは違ったものになってきている，と言えるのではないだろうか。その一つの顕著な顕れが，最近頓に言われるようになってきた“国際化”と絡んでの「発信型の辞書」という表現，あるいはそれへの指向性である[12]。

これまでの長い日本の英語受容の歴史からいって，最近まで辞書も又，英米の文化，思想，技術，等々を吸収受容していくため，その前提として文献を理解するための「字引く書」，つまり「字引き」としての役割が主であった，と言えるだろう（余談だが，今でもほとんどすべての「国語辞典」はこの「字引き」の域を脱しているとは言い難い）。勿論，今でも決してその必要性が無くなってしまったというわけではないが，視野は英米という枠を遥かに越えてグローバルなものになり，経済的にも世界有数の国に数えられるようになった日本と日本人は，好むと好まざるとに係わらず国際社会の表舞台に引き出されるようになってきた。そして，ハタと自己の英語の表現力の無さに気がついた，かどうかはともかく，それまでの受身一辺倒の英語ではなく，いかに「国際語」である英語という“道具”を使ってビジネスをするか，自己の利害を訴えていくか，というプラクティカルな面が強調されるようになってきた[13]。インプット無きアウトプットはそれこそ何も生み出さない不毛なものであって論外だとしても，インプットのみあってアウトプットの無い状態も又異常なものだとすれば，この「発信型」への転換は歓迎されるべき正統な方向転換だと言えるであろう[14]。又，従来の受信型（オンリー）の立場からも，学問的・高踏的ではあってもただ横のものを縦に直しただけというような偏ったものではなく，広く彼我の文化的差異に留意しつつ真に言葉とその背後にある国民性等を理解させるための工夫というものは当然あるべき姿であり，この点で英米の国語辞典たる一般の英々辞典が，曾てはその傾向を持ちながらも今やそれをほとんど捨て去ってしまったか，あるいは全く想念として持ち合わせていない種々の特色というものも，英和辞典なればこそ日本人の立場から有効と見做されて活かされ，拡充されているものもあるのである[15]。

“user-friendly” という表現で表わされている英和辞典の特色をもう少し細分してみるとどういうものが考えられるであろうか。以下，項目別に順不同で列挙すると次の如くなるであろう。

1. 基本語の見出し項目の大型活字使用
2. 重要語義のボールド体活字（及び大型活字）使用
3. 語形変化形の見出し項目化，及び明示化（基本語に関しては規則変化形もスペルアウトして明示）
4. 見出しの立て方における小項目主義（時に中項目主義併用）による検索の便（追い込み語の立項化）（及び，cf. 上記 3.）
5. 省略記号使用の減少，あるいは全廃（cf. 上記 4.）
6. 音声面，口語表現の重視（句動詞，成句等のアクセント表示，アクセント移動の表示，例文中でのアクセント，イントネーションの表示，口語的例文の多用，等）
7. 文型表示と連語関係，及び語の選択制限の明示（動詞型のみでなく名詞，形容詞型の明確化。共起する前置詞，副詞等の明示。動詞の主［目的・補］語，形容詞の被修飾語，前置詞の目的語等に来る語の明示。）
8. 枠囲み，あるいはそれと同等の特記欄の設置・充実
   a）語法注記（様々なレベルでの文法・語法的注）
   b）類義語・反意語の解説
   c）関連語・関連事項（言語百科的「星座的語彙表」等）の一括提示
   d）頻用語義の一括提示
   e）語源・語義の展開図（あるいは「本義」「基本義」「分義」等の明示）
   f）文化面，日英比較等の参考事項，及び図，写真等の多用
9. コンピュータによる分析（用例収集・分類，高使用頻度基本語彙の選定，等）
10. 和英索引の設置

このほか，２色刷り，フォニックスによる発音表記の併用といった新機軸や，語義の頻度順配列，名詞の可算・不可算の明示等の常識化した特色も指摘することができるであろう。更に細かく見れば，個々のケースでまだ挙げるべき特色はあるであろうが，上記のものがほぼその代表的な項目であろう。又，これら全てをそれぞれの辞典が備えているというわけでもないが，この中の多くのものはかなりの数の辞書に共通する特色だと言えるであろう。

上記の種々の特色を限られたスペースの中に全て盛り込むことはほとんど不可能に近く，従ってそこには自ずと説明度の深浅・軽重，あるいは割り振られるスペースの多寡といったことが生じてくる。これがいわゆる「ピラミッド方式」と呼ばれる，底辺の基本語，重要語・語義に篤く，頂点に近づくにつれて（学習辞典の観点から見て，頻度が低くなるにつれて）薄い扱いとなる記述方式を取らせるもとになっている。もっとも，これはそう呼ぶかどうかは別として概ねどの辞書であっても用いている方法であって，学習英和辞典の場合対象使用者を絞り込めば絞り込む程，この方式が徹底・強調されてくるということなのである。

このことは，それ自体としては決して悪いことでも何でもなく，ニーズに合わせた編集ということで積極的に評価されるべきことではあるのだが，少し先回りして問題提起をしておくと，大学の授業等での辞書使用ということとの絡みにおいては，往々にして問題を生じさせることにもなるのである。

以上，本稿では英語辞書，特にも英和辞典に関してその現状と今後の展望を論述して行く為の前提となる事項について序論的に述べてきた。次稿からは，順次（学習）英和辞典の編纂・出版の歴史的流れを跡付けることから始めて，その特色をより詳しく比較検討し，“user-friendly”という特色が持っている問題点やその他の問題点を考慮し，今後のあるべき（「理想の」）（学習）英和辞典の要件といったことに論を進めて行くことになろう。又，その後は，この英和辞典に関する議論と考察を踏まえた上で，英々辞典，和英辞典というものを眺めた時にどういう風景が見えてくるか，それを終始“日本人の立場からの辞書”という観点で考察して行くことにしたい。（続）

注

*. 本稿は，今後数回にわたって展開する予定の一連の論考の序論に当る。各稿は，それぞれのまとまりを考慮して組み立てられる予定だが，全体の論旨は完結時に明確になるであろう。したがって，各稿は序論－本論－結論という形式には必ずしも従わない。又，以上から，文献等も最後に一括して掲げることとする。但し，必要がある場合にはその都度，注の中で明記する。

1. 例えば，小川芳男は，彼が編者である『シニア英和辞典』の「はしがき」の中で「英語の学習では，辞典の利用のしかたいかんが進歩に大きな影響を与える。特に学習の基礎段階においては，一冊の辞典の選択は英語力の増強に密接な関係をもっている。学習に直結した親切で使いよい辞典の必要性が叫ばれるゆえんである。」と辞書の必要性・有効性を力説している。
2. 仏和，独和等の他の二ケ国語辞典の出版点数と較べれば，この事は理解されると思う。又，高校の場合辞書は多く学校指定のようで，一括採用になれば出版社の売上げは相当な額にのぼる。勢い売れる［採用される］辞書を目指すということになるわけである。
   但し，本文でも言っている様に，この事自体が悪いと言っているのでは，勿論無い。
3. 町田俊昭『三代の辞書［改訂版］』（三省堂ぶっくれっと）；小島義郎『英語辞書学入門』（三省堂選書），『英語辞書物語（下）』（エレック選書）参照。
4. 最近，出版や改訂出版が相次いでいる *Collins COBUILD English Language Dictionary, Collins COBUILD English Learner's Dictionary, Longman Dictionary of Contemporary English, Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English,* 等の学習英々辞典のセールスターゲットの最大のものの一つは日本だと言われている。
5. 例えば，佐々木高政『新訂英文解釈考』（金子書房）の「はしがき」（p.ii）に「英語を読み書き，話し聴く際にできるだけ日本語の介入を防ぐ，つまり英語のままで理解し発表するということである。日本語への迂回ができぬようにするということである。その「ゆとり」を与えぬよう「早く」読み書き，話し聴かせることが必要なのである。」とある。又，「英語で考える」の提唱者であった松本亨はその著書の中で「私は，日本の英語教育の将来を考える時に，現在の行き詰まりを打破して，日本人がその生まれながらにして持つ能力と伝統的な努力心とによって，自由に英語を使いこなせる日が一日も早く来ることを願ってやまない。そしてその打開の方法は，「英語で考える」ことを主眼とした教授法にあることを断言し，一人でも多くの英語学者，英語学生がこの道に入ることを切望するのである。」（『英語で考える本』（英友社），p. iii）とか，更には「...英語は英語で考えよ。英語をやるなら英語で考えるようになれ。英語を話せないものは，英語を教えてはいけない。英語の意味は音（おと）にある。」（『英語で考えるには』（英友社），p. iii）とまで断言している。
6. これと似たことで，一般的には大学に入って［成人して］から習い始める第二外国語の場合も，いきなり仏－仏，独－独辞典等を使用することは難しく，大体は「○和辞典」から入って行くことに

なる。

7．念のために言うと，小型のポケット版（例えば，『研究社リトル英和』，『デイリーコンサイス英和』の類），中学生用（各種のジュニア英和の類），あるいは机上版の大辞典（『研究社新英和大辞典』，『小学館ランダムハウス英和大辞典』の類）は本稿では対象から外して考えている。

8．そうなると，勢いレイアウト，装丁，外箱の色やデザイン，といったものが付加価値を持ってくるからか，［新装版］と銘打って（あるいは何とも断ることもなく）外箱のみ変えて定価を上げる（勿論，新刷に際して製作費のコストアップがあり，それに対応しているのかもしれないが...）という様な珍現象（？）も生じてくるのである。

9．確かに，いくら慎重に選択しようとしても一冊が他の全ての良さを持っているということはほとんど無いことなのだから，前もってそんなことに時間をかけて頭を悩ませるよりも，ともかくどれか一冊を手元においてある程度使い込んで，自分なりの判断基準を確立してから他の辞書を調べてみて，より良いものに買い換えるほうが結局は近道になる，という議論もあるであろう。確かにそれは尤もな言い分なのだが，そうなれば，最初に購入する辞書は正にどれでも良いということにもなり，結局学校指定の辞書で間に合わせるということにもなってしまう。教師がより良い辞書を選んで指定してくれれば初めはそれでも良いであろう。ただ問題は，普通の場合はその次のステップにまで進まない，ということではなかろうか？

10．笠島準一『英語の辞書を使いこなす』（講談社現代新書，pp. 45～47）参照。尚，現筆者もある英和辞典の原稿執筆に携わったことがある。

11．むしろ，各社がそれぞれのノウハウを持ち寄って，共同で各レベルの可能なかぎりベストな辞書を作るほうが良いのではないか，とも思うのだが，余りにも非現実的な提案だと一蹴されてしまうであろうか？

12．但し，この表現自体は新しくても，今までの辞書が全く「発信型」ではなかったと言い切ることは勿論できない。

13．渡部・平泉英語教育論争に代表される，教養英語か実用英語かというある種“不毛”な議論もこのあたりの事情と密接に絡んでくる。又，新指導要領の中に盛り込まれたコミュニケーションという新しい分野もこのことの具体的な現れだと考えられる。

14．いわゆる「正則的」学習法もこの範疇に入ると思うが，現筆者が全面的に「変則的」方法論を否定しているということではない。外山滋比古『新・学問のすすめ』（講談社学術文庫）参照。

15．例えば，*POD*(*The Pocket Oxford Dictionary*) の5版迄の特色の一つであった言語百科項目や，*POD*(6版まで)，*COD*(*The Concise Oxford Dictionary*)（7版まで）が用いていた綴り字を活用した簡便な発音表示，言葉の慣用法に重点を置く記述等，この2つの辞書の特質は本家のオックスフォードが捨ててしまった今でも英和辞典の中に引き継がれている。